

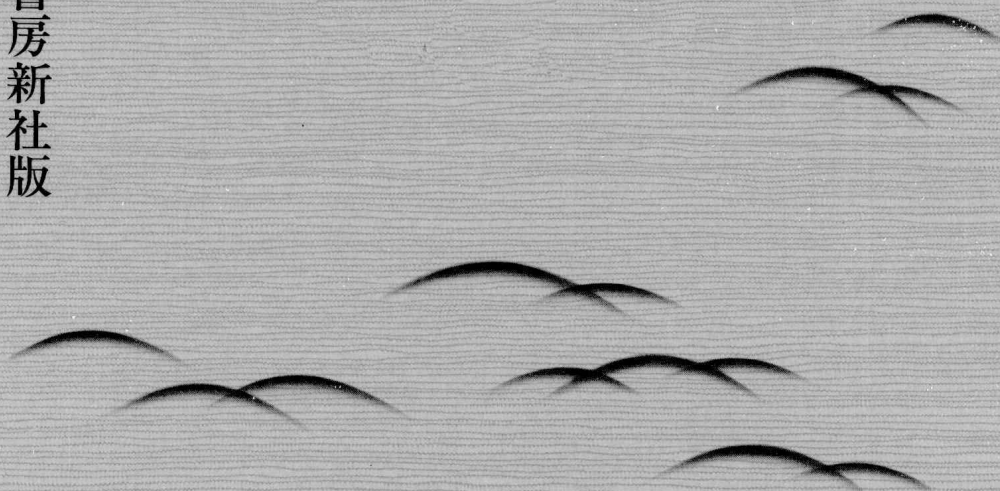
13

一八〇九〜一八三二（江戸）

古典の事典

精髓を読む
—— 日本版

河出書房新社版





古典の事典へ精髓を読む——日本版——

13 一八〇九—一八三二（江戸）

昭和六十一年六月十七日 第一刷発行

編纂 古典の事典編纂委員会

発行者 清水 勝

株式会社 河出書房新社

発行所

東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目三番二号
電話〇三—四〇四—一二〇一

印刷

大日本印刷株式会社
株式会社 サンコー

製本 大日本製本株式会社

©1986

無断転載複製を厳禁する

ISBN4-309-90213-8 C0591

まえがき 閉塞の時代に花開いた民衆の文化 七

春雨物語 人間群像を鮮やかに描いた短編集 一七

東海道中膝栗毛 愛すべき主人公の奇想天外な道中記 二九

椿説弓張月 虚と実が織りなす奇想天外な大ロマン 四一

浮世風呂 江戸庶民を活写する滑稽本の代表作 五五

南総里見八犬伝 江戸市民を魅了した傑作長編小説 六三

浮世床 江戸庶民の長屋の生態を描く滑稽本 七五

修紫田舎源氏 江戸末期の代表的絵入り大衆小説 八三

一茶発句集 強烈な個性と独自の表現に立つ句集 九七



おらが春

愛児追悼を頂点とする日記体句文集

一〇九

花月草紙

江戸時代の代表的な雅文随筆文学

一二一

玉勝間

宣長の人と学問を知る好資料

一三一

甲子夜話

好事家大名が一時代を描いた名随筆

一四一

万代狂歌集

天明狂歌最後のアンソロジー

一五三

日本外史

漢文で書かれた武門の覇権争奪史

一六三

新編武蔵国風土記稿

江戸幕府の編纂した武蔵野の地誌

一七五

御府内備考

地誌を網羅した江戸研究の基本図書

一八三

先哲叢談

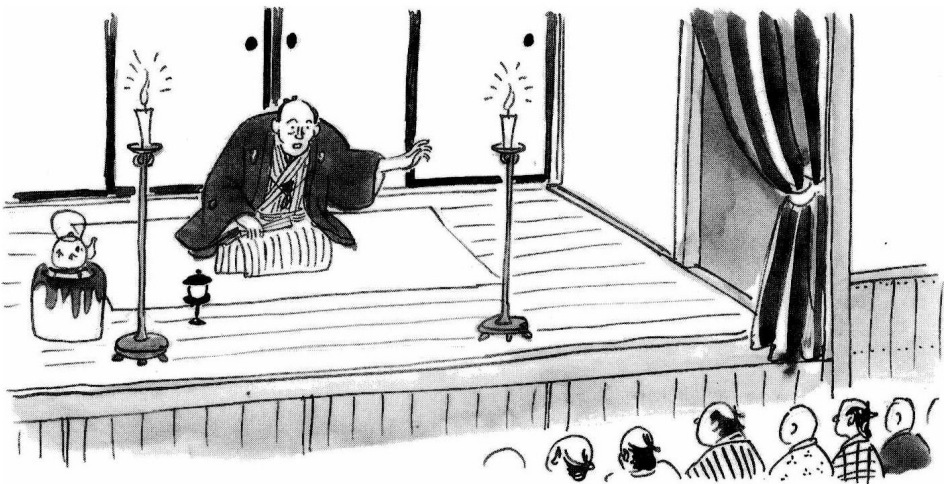
儒教の精神と個性が息づく逸話の宝庫

一九一

古道大意

天地開闢以来の真の道を説く国学書

二〇三



言志四録

西郷隆盛も愛読した名言随想録

二一五

夢の代

大阪商人の持つ逞しい批判精神

二二五

新論

後期水戸学の代表的な著作

二三五

稽古談

幕末の最も早い重商主義的経済書

二四五

経済要録

幕末危機に対処するユニークな構想

二五五

お染久松色読販

江戸歌舞伎世話物の変わり種

二六五

東海道四谷怪談

怪談物の代名詞にもされる名作

二七五

笑話之林

怪談咄の祖による江戸後期の笑話本

二八七

禪茶録

宗教としての茶の湯を主張する

二九七

插花百練

江戸時代後期の唯一の花道理論書

三〇七



插花百規 三二五

池坊生花の原点を語り伝える作品集

機織彙編 三二一

織維加工技術の総合技術書

蘭学事始 三三二

蘭学発達の経過を説いた唯一の文献

仏国曆象編 三四三

仏教を護る須彌山宇宙論の宣伝書

算法天生法指南 三五三

日本式代数の明解な公式集

世事見聞録 三六五

太平の世に問う警世の書

嬉遊笑覧 三七三

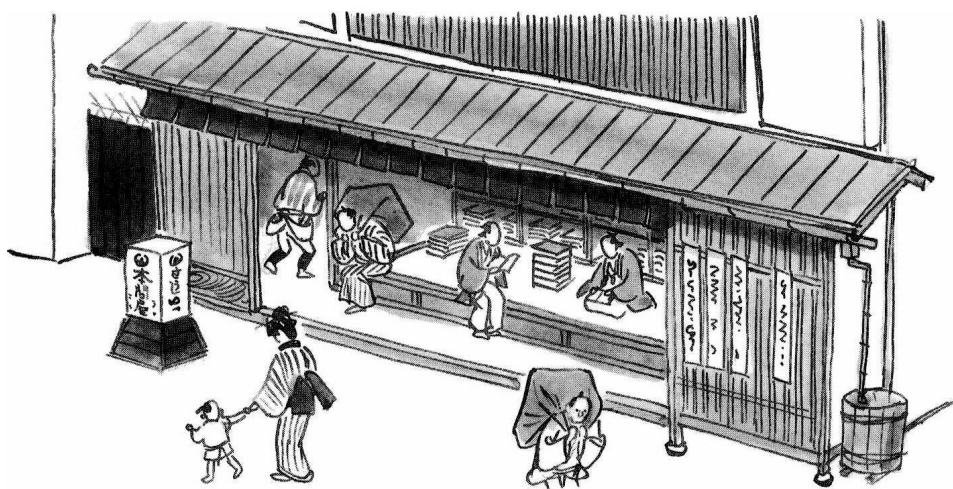
雑学博士の書いた百科事典的随筆

船長日記 三八三

最も文学的と評される漂流記

真澄遊覧記 三九三

和歌を交え庶民の雅を描いた紀行文



この事典を利用される前に

○第十三巻について

(一)この巻では、一八〇九（文化六）年から一八三一（天保二）年の間に成立・刊行された古典を三十七作品収録しました。成立・刊行年の未詳のものについては、作者の生没年を拠りどころとしました。

(二)この巻に収録した古典は、それぞれ文学、歴史、宗教・哲学、社会、演劇・歌謡、芸道、産業、科学、地理・民俗のジャンルに大別して、時代順に配列してあります。

○中扉について

(一)収録古典にはすべて中扉をもうけて、分野、書名、著者・編者名、「この古典の五つの魅力」を表示し、原本写真を掲載しました。

(二)書名、著者・編者名などに二つ以上の書き表し方、よび名がある場合には、学界・教育界で定説となっているもの、一般に広く用いられているもので表記することにしました。

(三)中扉の「この古典の五つの魅力」では、作品の要点、分野、歴史的価値、後世への影響、現代との関わりなど五つの観点から、その古典の特色を簡潔にまとめました。

(四)また中扉には、現存する貴重な原本（版本・写本・古活字本など）から、本文の一部を写真版で掲載しました。とくにこの巻でとりあげた「読みどころ」と関連の深い箇所は、参照頁を表示することにしました。

○解説について

(一)作品の解説は原則として「あらまし」「原典の構成」「成立の時代」「影響と価値」「原典と参考書」「作品の舞台」「しおり」の七項目をもうけて、どこからでも容易に検索、読めるようにしました。ただし、作品によっては、必ずしも適合しない項目もあり、その場合には他の詳記すべき項目に重点をおき、その項目は省略することにしました。

○読みどころについて

(一)読みどころでは作品の重要な場面、また一般に多く引用される箇所を抄出して、上段に原文を、下段に現代文を併載しました。

(二)主要な作品については、鑑賞の手引きとなるように、現代文の冒頭に抄出箇所の概要を添えることにしました。

(三)原文の仮名づかいは原則として、歴史的仮名づかにしましたが、読みやすさを考慮して、ふりがなは現代仮名づかいとしました。ふりがなは外国の地名や特殊な用語を除き、すべて平がなで付すことにしました。

(四)原文も新たにふりがな・送りがな・濁点・句読点・並列点（中黒）・段落を施し、さらに会話文・引用文には「しや」を、書名には『』を加え読みやすくしました。また原文中の割注・頭注は（ ）でくくり、他の引用文と区別しました。

(五)原文中のく、などのくり返し符号は使用せず同字を重ね、漢文体も読み下し文（平がなまじり文）にして、原文の読解鑑賞に役立つように配慮しました。

(六)現代文は、わかりやすい内容にするために、難解な語句は説明を補記し、また旧地名は現地名を、和暦年数は西暦年数を表示することにしました。

○監修者

石井良助（東京大学名誉教授・法学博士）

伊藤鄭爾（元工学院大学学長・工学博士）

井上靖（小説家・芸術院会員）

数江教一（中央大学名誉教授・文学博士）

角田文衛（平安博物館館長・文学博士）

暉峻康隆（早稲田大学名誉教授・文学博士）

奈良本辰也（歴史家）

古川哲史（東京大学名誉教授・文学博士）

松浪信三郎（早稲田大学名誉教授）

山本健吉（文芸評論家・芸術院会員）

○編纂者

朝倉治彦（国立国会図書館司書）

遠藤武（文化女子大学教授・文学博士）

大曾根章介（中央大学教授・文学博士）

北小路健（歴史家）

紀田順一郎（評論家）

久保田淳（東京大学教授・文学博士）

祖父江孝男（放送大学教授）

田辺聖子（小説家）

谷沢永一（関西大学教授・文学博士）

馬場あき子（歌人）

春田宣（国学院大学教授・文学博士）

松田修（法政大学教授）

松本寧至（二松学舎大学教授・文学博士）

黛弘道（学習院大学教授・文学博士）

宮田登（筑波大学教授・文学博士）

吉田豊（歴史家）

閉塞の時代に花開いた民衆の文化

† 抑圧の隙間から噴出するエネルギー

本巻には江戸時代文化の爛熟期と呼ばれる文化・文政期（十九世紀初頭の約三十年間）を中心とする名著、名作が収められています。

後世の歴史家から化政度と名づけられたこの時代は、大きな災害や凶作もなく、世の中はひとまず安定を続けていました。

十返舎一九は、その『東海道中膝栗毛』三編で、当時の東海道のありさまを「街道のなみ松（松並木）枝をならさず、往来の旅人、互いに道を譲り合い、泰平をうたう。（略）雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのずから独行し、女同士の道連れ、ぬけ参り（親や主人に無断の伊勢参宮）童まで、盗賊かどわかしの愁いにあわず」と述べています。

盲人、女性、子供までが安全に物見遊山の旅を楽しめるなどは、戦乱や飢饉の絶えなかった時代には思いもよらないことで、一九が「かかる有り難き御世」とたたえたのもひとつのことでした。

もちろん、その時代といえども、封建制度の根本的な矛盾から生まれる武家の困窮化、都市と農村の貧富の広がりはいじりじりと進んではいましたが、幕府の支配をゆるがすほど表面化するには、まだ間がありました。

そして、厳格主義の松平定信による「寛政の改革」によって一時は息をひそめていた町人の経済的、文化的活動はふたたび活気をとりもどし、極彩色の錦絵や歌舞伎の名舞台に象徴される華麗な化政度文化を生み出したのです。

よく、十九世紀に入ってから庶民文化は、江戸時代前期のような健康さを失って、退廃的、享樂的になっ

てしまったと低く評価する人がいます。なるほど現象としてはそのような傾向が確かにみられますが、それは封建の世のがんじがらめの抑圧の中で蓄積されてきた庶民のエネルギーが、エログロやおふぎけの形をとって噴出したものとみるべきでしょう。

その根底には、お上から押しつけられる既成の道徳や価値観に、うわべは従うようにみせながら、人間としての本音に生きようとする逞しい精神が流れているように思われます。

そのことを、四世鶴屋南北の傑作『東海道四谷怪談』（文政八年＝一八二五初演）について考えてみましょう。

† 既成の道徳に挑戦する伊右衛門・お岩

まず『四谷怪談』の主人公、民谷伊右衛門を、武士道の鑑の「忠臣蔵」の落ちこぼれとした設定がくせものです。良心のひとつかけらもないような伊右衛門は、自分の旧悪を知っている実直な四谷左門を口封じのために斬り殺し、その娘の岩には父の仇を討ってやると称して妻にします。ところが、隣家の伊藤家（吉良方）の孫娘に惚れられると、岩がいては出世の妨げと、毒薬を飲ませて殺してしまいます。その徹底した悪党ぶりは、彼が赤穂浪士の一員となっているだけに、一種の偶像破壊の痛快さをさえ感じさせます。

ところが、この横暴・非情な夫に対し、ひたすら忍従したあげく悲惨な最期をとげた岩は、あの世のものとなった途端に、伊右衛門とその一味に対するすさまじい復讐を開始します。歌舞伎の舞台ではさまざまなトリックを使って見物客をぞっとさせる出沒ぶりは、伊右衛門ならずとも、もういい加減にしてくれと言いたくなるほどの執拗さです。

最も弱く最もしいたげられてきた者こそが、その恨みを爆発させたとき、いかに恐るべき存在となるかを、この劇の後段はなまなましく訴えているのではないのでしょうか。

官憲のきびしい検閲のもとにあった江戸時代の芝居ですから『四谷怪談』も表面的には、悪は滅び、善は勝

つという教訓を掲げてはいます。しかし、この作品が当時の観客大衆に歓迎されたのは、そんなたてまえによってではないでしょう。

この世では伊右衛門が、あの世からは岩が、既成の枠組みを遠慮会釈なく打ちこわしていくエネルギーが、積もり積もった民衆の怨念を発散させて喝采を呼んだものと思われます。

時代が化政度を過ぎて天保（一八三〇～四四）から幕末へと進み、幕政の行き詰まりが誰の目にも明らかになってくると、大衆娯楽の世界では、俠客、義賊、毒婦といった封建秩序とまっこうから対立する主人公たちが、異常なまでの人気を集めるようになります。

幕末から明治初年にかけて活躍した二世松林伯田という講談師は、白浪（盗人）ものと呼ばれる多くの講談を自作自演して「泥棒伯田」と呼ばれました。

とりわけ聴衆から熱狂的なまでに歓迎されたのが、義賊鼠小僧次郎吉の物語です。次郎吉は天保三年八月に処刑された実在の大泥棒ですが、伯田はうそとまことをとりまぜて、彼を大名や豪商から奪った大金を、貧しい人々にひそかに分け与える義賊に仕立てあげたのです。

また、今も講談や時代劇で親しまれている上州（群馬県）の俠客国定忠治も、幕末の大衆芸能の中から生まれた「民衆の英雄」でした。

実説の忠治は、殺人と関所破りの罪で嘉永三年（一八五〇）に処刑されただけの人物ですが、伯田や宝井琴凌といった講談師たちは、彼を義理人情に厚い男の中の男として、民衆を苦しめる悪代官や悪徳商人をこらしめる正義の味方に仕立てあげたのです。

伯田と同時代の劇作家で鶴屋南北に続く巨匠である河竹黙阿弥もまた、多くの作品の中で悪の道には入りながらも、強烈な正義感と行動力を発揮する魅力ある人間像を生み出しました。

今もしばしば上演される『青砥稿花紅彩画』（『白浪五人男』）は、その絢爛たる勢揃いの場があまりにも有

名ですが、「五人男」の筆頭である日本駄右衛門にっぽんだえもんがその名乗りで「盗みはすれど非道はせず、人に情けを掛川かけがわから……」と言うように、やはり義賊の物語となっています。

同じく黙阿弥が明治に入ってから書いた『天衣紛上野初花』くもにまごうえのはつはな（『河内山と直侍』こうちやまなおむらい）では、もはや武家階級への遠慮の必要もなくなったため、主人公の河内山宗俊こうちやまそうしゅんに大名屋敷の玄関先で痛快きわまる名セリフをぶつけさせました。宗俊は江戸城に仕えるお茶坊主でばくちやゆすり、たかりの常習犯ですが、松江侯の屋敷に押し付けてきた動機を「悪に強きは善にもと、世の譬えたとにもいとうおり、親の嘆きが不便さに、娘の命を助けようと……」と、堂々と宣言しています。

この「悪に強いは善にも強い」ことこそ、封建制度末期の民衆にとつての「期待される英雄像」でした。幕政の行き詰まりが深まり、既成の権威が色あせていく中で、民衆はもはやかつてのように名君や忠臣に期待することができなくなり、むしろ、これまで社会の敵とされていた人たちの中にこそ、自分たちの真の味方がいるのではないかと考え始めたのです。

↓ 庶民のサークルが育てた笑いの文芸

世の中が明るかろうと、暗かろうと、民衆はいつの世にも健康な笑いを求めます。

娯楽性と芸術性を兼ね備えた話芸として今も多くファンを持つ古典落語が、プロによる大衆芸能としてほぼ完成されたのが、やはり文化、文政（一八〇四―一三〇）のころでした。

これに先立って江戸を中心とする庶民の間でおおいに流行したのが、アマチュアのグループによる小咄こばなし（短い笑話）の自作自演の会です。

安永元年（一七七二）正月、幕府御家人で狂歌にもすぐれた木室卯雲きむろうぐんという武士が、当時の江戸小咄を集めた『鹿の子餅』かのもちを鱗形屋孫兵衛うろこがたやまごべゑという本屋から出版して、小咄本ブームのきっかけを作りました。

これ以後、小咄の愛好者は急速に増えて、武士、町人が入りまじったグループが続々と生まれ、仲間の家に

集まっては聞きおぼえた小咄を披露し、また新作や改作に工夫を凝らしては咄本にまとめて出版するようになりました。

この幅広い愛好者を背景として、寄席落語の事実上の創始者となったのが、初代三笑亭可楽さんしょういかくです。

可楽は本名を又五郎またごろうという櫛屋くしやの職人でしたが、趣味が昂こうじてプロの落語家となり、寛政十二年（一八〇〇）、最初の落語会を主催、文化元年（一八〇四）には三題噺さんだいばなしを始めました。これは、その場で客からまったく関係のない三つの題をもらって、それを織り込んで一つの噺にまとめて演ずるというむずかしい芸です。その夜、可楽は「弁慶」「辻君」「狐」の三つの題をもらって一席を演じ、喝采を受けました。これが三題噺のはじまりで幕末から明治初年にかけておおいに流行しました。今もときおり上演される『鯀沢』は、近代落語の祖といわれる三遊亭円朝さんゆうていゐんちやうが、鉄砲、卯酒、お題目の三つの題から即席に仕上げた起伏に富んだ名作です。

初代可楽以後、寄席落語がさかんになると僅か二、三分で終わってしまう小咄では間がもたず、一席の時間はかなり長くなって、マクラ、本題、落ちで構成される落語の定形ができあがります。こうして、現在も落語界の大きな名前となっている柳亭左楽りやうていさかく、三遊亭円生さんゆうていゐんせい、春風亭柳枝しゅんぷうていりゅうえだなど初代の名人たちが輩出して幕末、明治初年の全盛期を迎えます。

幕末の安政（一八五四～六〇）ごろには、江戸だけで講談の寄席が二百二十軒、落語の寄席が百七十二軒あったという記録もあります。江戸の中心部には各町内に一軒は寄席があったといわれ、一日の仕事を終えた商人や職人は、毎晩のように寄席に通って疲れをいやしたのです。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』、式亭三馬の『浮世風呂』『浮世床』に代表される笑いの文芸も、この時代の庶民文化のすばらしい産物です。

一九はもと武家の出身で香道を学び、のち文筆をこころぎして、江戸有数の出版書店である蔦屋重三郎家つたやじゅうさぶろうに住みこんで雑用を手伝いながら修行しました。そして『道中膝栗毛』の初編を書き上げ、重三郎に示しました

が、蔦屋での出版をことわれ、やむなく同業の村田屋治郎兵衛店から享和二年（一八〇二）に出版します。これが予想外の好評で版を重ね、つぎつぎと続編が出、当初の「東海道」だけから、「四国金比羅参り」「宮嶋参り」「木曾街道」「善光寺参り」等々、計十二編にまでふくれあがったのです。

その内容は、ご存じの弥次郎兵衛、北八（喜多八とも）の他愛ない滑稽道中記ですが、色気と食い気丸出しの二人がつぎつぎと巻き起こす失敗のおもしろさとともに、道中各地の風景や人情・風俗・名物までが詳しく紹介されて、肩の凝らないガイドブックの役をも果たしています。

このような『道中膝栗毛』の人気の背景には、冒頭で述べたような、社会の安定、大衆生活の向上によってもたらされた空前の旅行ブームがあったのです。

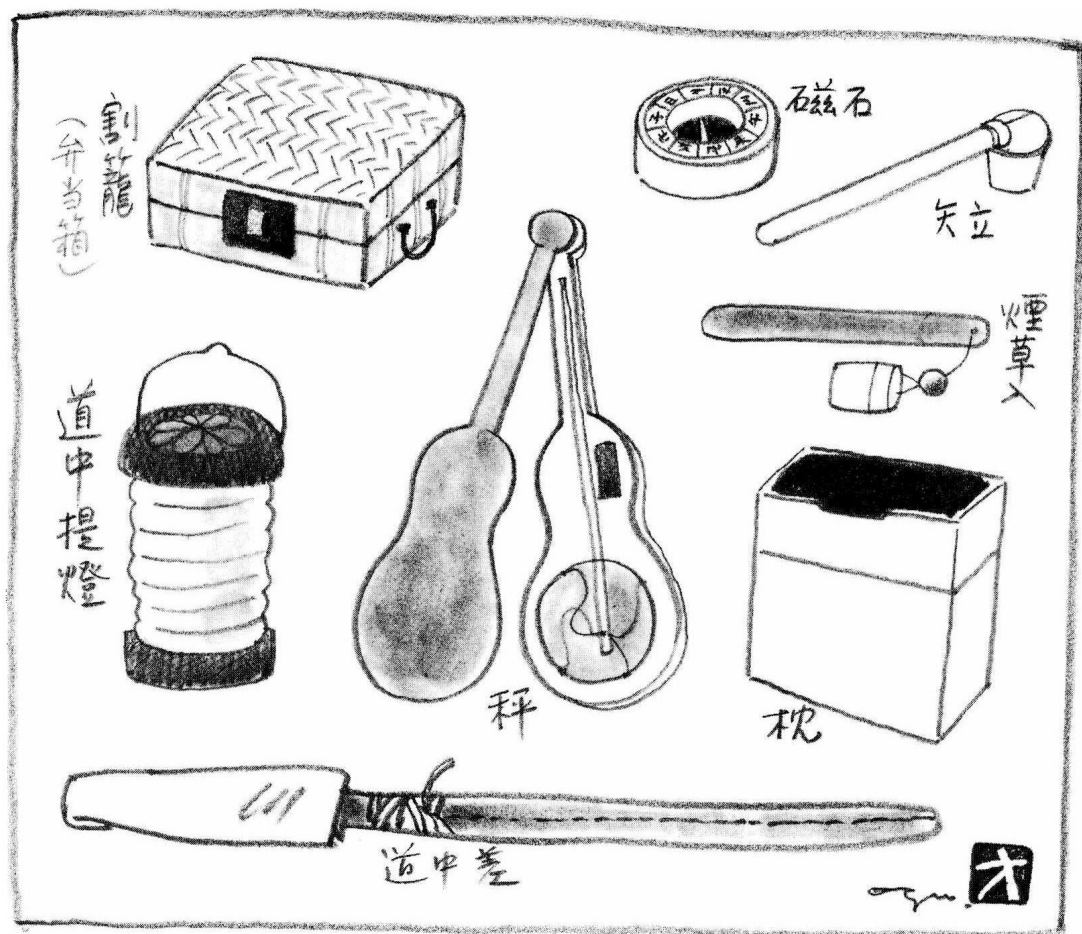
当時、旅のガイドブックとしては、さまざまな名所図会や道中記がさかんに出版されていましたが、弥次・北の二人をガイドとして、旅をする人も、しない人も、楽しみながら読める道中記としての『道中膝栗毛』を思いついたのは、一九の大きな手柄でした。

さて、読者とともに日本各地を旅する趣向の『東海道中膝栗毛』に対して、舞台を、江戸市民にとってのコミュニティセンターだった風呂屋と髪結床に設定して、つぎつぎとそこに訪れる人たちの生態を描いて笑いを誘ったのが、式亭三馬の『浮世風呂』『浮世床』です。

三馬はもと伊豆八丈島（東京都）の神官の子孫で江戸に出て文芸の道に進みましたが、かたわら薬屋を営み、化粧水「江戸の水」を工夫して売り出すなど、なかなかの商才も発揮しています。

『浮世風呂』は文化六年（一八〇九）に前編が発刊され、『浮世床』は文化十年に初編が発刊されました。

どちらの作品にも特別な事件が起こるわけでもなく、時間の経過にしたがってつぎつぎと現れる客が、それぞれ勝手にしゃべり合っては立ち去っていくだけのことですが、その登場人物の多彩さ、会話の中身の豊富さはおどろくばかりです。言葉についてきわめて敏感だった三馬は、身分、出身地、年齢などによる言葉遣いを



交通の未発達なこのころの旅は困難と危険に満ちており、その携帯品にも様々な知恵と工夫がなされている。